重修真書太閤記 十一編 五

晴

和書門
類 三四〇五三 號
函 二二六
架 一三
冊 四〇

内閣文庫
和書
類 三四〇五三 號
冊 四〇
函 一七一
架 一二

第七

内閣文庫

番號	和 34053	
冊數	40(35)	
函號	171	45

共四十

重修真書太閤記十一編巻之十三

夏目舎人助高名の事

弁湯浅七右衛門首を奪ふ事

小幡帯刀本苗ハ恩田氏・沼田の一族ゝして・智謀人ふ[illegible]くれ[illegible]のこゝろ[illegible]ハ心も剛よ・打ものゝ取ても・達者ゝ[illegible]ハ・信貞小田原よ籠るゝ[illegible]ゝて・此帯刀を・彦三郎ゝ後見とせ[illegible]ゝ・去ゝ[illegible]よ・夏目舎人助ゝ下知ゝよ・旧友たる天野治右衛門ハ謀言よゝ宮崎の砦を破られ[illegible]て・無念ゝれとも・せんゝゝゝゝてハへ[illegible]返[illegible]合せて・火花をちら[illegible]て戦

ひけると見く夏目舎人助も馬をせいぐ〜鎗をとりく突立つきたて、たゝかふたり然はあ小幡ら手よりあとぞめの羽織着たる武者只一人ふりかつらてい寄手をつきのけ取てかへ〜てを上杉勢を切ちらひ味方をまとめさ後やり〜たる有さまたゞめのおらぎえ〜ろけり舎人助ちり〜と馬をかけよせ村上源氏の末流有田越前大目定朝の末葉夏目左衛門尉定國の嫡子舎人助定吉なりと呼きれい かの武者馬を引かへ〜その方を待〜こと久〜かりき いざ参らふと聲をかけ突けはうをい たゝかふあらさぬ火花をちら〜て目ざま〜既ふ六七十合よをひ〜かとも勝負おかりけるゝ何とゝ〜たりそん かの武者の馬驚ひてそ孫おゞをけふそのうをか の武者真逆さ落馬〜たるを夏目ら組おる澤田作右衛門かけよりて首をかゝんと おし〜けは処へ甘糟備後守ら侍さ湯淺七右衛門といふ人その〜そ〜ま近つきかの首をうゞかく ふげゝくを夏目いかりて馬を飛ら〜追いめ湯淺ら持たる首をとりかへさんと おし〜けふ時湯淺鉸具をいれて馬をち〜らひ舎人助ま〜いらり太刀をぬひて湯淺らさ〜めの〜端を切をと〜たゝい夫を取かち舎人へそのく〜ち追ゝせん まく南をさ〜

て・突やぶる有さまは・さかがら・猛虎の群羊をかゝ
ゆ如く・阿修羅王の荒たるさまも・さるよは・いらて
勝るへき・雑人原ををくくうきふせ〳〵・氣色そなた
る処へ・小野寺刑部・石坂與五郎・きくこきさて・舎
人助と共よ・かせぎろう・舎人助は・砥澤川の端ふ〳〵
て・よき敵一人・はきふせ・自身首をとらんとする処
へ・神保五左衛門尉・させきろう・一太刀うちて・助け
たるぞと・詞をかけ〳〵・舎人助ふり仰き・我うち
止たる・死人なり・首れ〳〵・取をへ〳〵と・いくもとて・
神保面目かげよ・御免なへと・いひをて・敵中へ切て
いる・甲首一ツとりて・引かへ〳〵・舎人どの・御覧なへ・

かくの如く〳〵・仕合〳〵は・穏便よかして・給はへと・
詫言して・引かへたる・兎角さかうち・藤田能登守
勝閧の式を取行ひ・松枝の本陣ふ・いろう・首帳の次
第を正〳〵ける処へ・夏目舎人助・澤田作右衛門を・同
道して・甘糟備後守ろ・役所ふ・いろう・舎人ろ打たる・
敵をあもとろ・作右衛門よ・首とりなへと・申付〳〵処
へ・御組湯浅七右衛門かけきろう・澤田をおしのけ・
首をらばひて・ほ・その首このものへ・御かへ〳〵ある
べ〳〵と・申入〳〵かは・備後守清長・大よせきたち・我等
ら組よ・たやうふふ不埒のものか・はら〳〵・但〳〵これ
と申・證據あるやと・いふ・舎人助かへ〳〵・おまろ・楚忽の

上申へき定吉と申おゝめゝいろ澤田ゟ取と申付たる首をうばひ取ハそのハ白地ゟ黒き二ハ引両のさゝをのかう御組のきろゝゟ相違かゝその上ゟそのさゝめの残らハ札をはけて御足せひへたしかゝ證據をハけ置さハと申ゟよう我隊のさゝめの残足ハかゝ取あつめこれをあらためこゝゟ端の切たる指物あう舍人助もゝこゝよう我手ゟきろう出ゝゝかゝ指物のゝをゝいゝをて合をこゝゟいかゝゟ只今切とらゝたるゟ相違かゝそのさゝもの主を呼いゝせば湯淺七右衛門かう舍人助澤田をよひて湯淺ゟひき合きゝかへ湯淺

赤面して詞ゟゝ備後守湯淺をゝきよせ清長ゟ隊ゟさやうの不法のそのかゝと夏目どのゟいひゝ口を塞かゝ以ゟくゝ我等ゟ恥をあさえゝ臆病ものめいゝゝをへきと怒りける時ゟ七右衛門流る涙をゝゝ拭ひそのゝ期ゟをよび申ハゝゝ命ゝゝさゟいハゝをゝへハとおゝゝめさゝべくハへどゝ事のゝゝまつ一通り申ハけ仕べくハ夏目どのゝ討たまゝ武者ハ白倉左衛門尉と申て小幡ゝ親ゝゝめゟハ七右衛門牢人して爰かゝこ遍歴仕足ハ処上列ゟいゝゝハこゝ實ゟ困窮仕ゝ一銭の貯ハかくかうハゟそゝから白倉左衛門尉

ふめぐらあひ・身の不仕合せを・おげきゆへに・左衛門尉・我館ふとゝもおひ・長屋一いか〳〵あさえ・朝夕のまかないを・いとゝ・いとよをよぐ・夏冬の衣服まで・さべて・白倉ら情あて・乏しかりけるぞ・三年あまりと・きぐ〳〵いうち・川狩ふいで〳〵・出りひのやうなる喧嘩を仕いぐ〳〵・多くの人を討て・白倉ら家を立のき・そのゝち當國へきゝら・甘糟殿の御隊よりつてれば・今日夏目どの〳〵・打あひたまふをきれに・重恩うけたる・白倉左衛門尉ぞ・ゆうて・これをたきけて・夏目とのを・打へきふもいらん・いまふせよ〳〵・ためらふうちよ・舎人助どの・見事よ・突ふせたまひつるに・

せめて首をうぢん〳〵・供養せくやとそんしての事ふれ・ゆて首をに・一堆の墓とおしてひへに・いまに入用ふきつゝ身ぞう・甘糟どの〳〵・御恩をむくひ申ぞ〳〵ふと・殘ア多くれへとも・と・いとよう早く刀をぬきて・のんとを突ぢらぬきて・死したりけり・舎人助ゆ備後守ゆ・二度仰天して・生捕のきのみ・舎人ら討て・首をに・湯淺みとられ〳〵・死骸の物具より・茜ちめの羽織を見ぞ〳〵・是こそ白倉左衛門尉ら字をあう・湯淺に・おくれ・義理のためよ・死したる侍よと・無弥の名を芳しくく

流布本湯浅七右衛門縛首うゝとしをゝを記を誤るゝいま湯浅の家譜のようて改正し

このゝ陣中のかくれなかく取々の湯浅の事を語り傳へしかば神保五左衛門尉舎人助のうちとめし死人の一太刀うちて助たりと詞をかけしことをさぢやかゝ藤田の陣所のいろ〳〵の仕合と申されへ藤田能登守舎人助をよびて此ことを訂しけるの舎人助その上ゝをでの濟たりまさめりかへしゝべき事のあらんと云ふ神保いやさやうのへいはへども御邊と某と相對のをまして〻心よからんきれのへ藤田どの〳〵御耳のいゝ我等

の誤せしことを明白のせしふくれと申けるへ舎人助再度うちかへしかんかえ見ひへへ某打ふせてひへへおそ神保どの左やうの他したまのかれも右のその死せひへへ實の神保どの〳〵御芳志たるへしと申て舎人助も打ひらひ互のゝろよく引ゝこのゝしと形の神保のちの保科の家の仕え

隠岐守と名乗しなり

關白秀吉公相州御進發の事

年伊奈熊藏智謀の事

天正十八年三月朔日關白秀吉公京都御發駕あり

ける時花の下乃紹巴

關白えつゝしむおびくかをこかむ
といふ發句を獻し祝し奉る幾内南海山陰山陽の
勢十七萬騎伊勢尾張両國の勢を合せて十八萬餘
騎尾張國春日井郡中村い關白の生処といふを以
てあつゝ入三日逗留したまひこの村をへつ作り取
無年貢とおしたまひしかい百姓どもよろこひの
躍りをおして關白をおくさめ奉りける其の中に
頒白の老人二人をかゝらみよびたまひ一人ハ
作十郎一人を太郎作とやと仰られしかい二人と
もいらみも仰の如くいと申その時關白作十郎ハ
をとは九ひの年まゝおやや今年六十五歳おるへし

太郎作ハ七ひのとしもとあつゝと覽るるかう
尤撰らと御尋あるゝハ太郎作いらみも御意の
ごく六十二歳ふいと申上る關白さうゝ光明
寺の榎の下て軍のまおびしたる時をれハ大將太郎
作ハ旗持作十郎ハ太鼓うちく有たらおんとふ田
原の北條退治ハ窠おからて事ハをむ其方二人供
せいと仰はけられそれよろ二人御供ふめしつれ
らをしとやや又おゝ所なりて關白仰らをけるを
作十郎太郎作よくさけよをれら草やうふ出た時
ぶん仁王といつゝ有たよくをれを泣をく
奴じや あいひハぞふしたと仰らるをハ作十郎太

即作仁王ハ、まことに果ましたと申上る。關白おゐ仁王ハ死たまてゐ、それでゐ、仁王ゐ幽靈ゐあしこゐ居ゐる。むゐしをれを泣せたゐどの骨ぶとの奴だ幽靈てゐ、くゐしくおいあいつを、塊めちゐして、小田原へ、ゐ、ゐ、ゐ、ゐ、と、仰いざされ、これをゐ、同しく御供ゐ、召供したまへう（此一節中村ゐ、く、ハひ、同月十日、三列吉田ゐ、つきたまひけるか、去八日より雨ふりつゞきたまひ、川々水まして、橋落たり、十一日猶雨止されとゐ、御進發あらんと、その御催しあり、けるゐ、駿河の御家人、伊奈熊藏御ちそうし、しく、此処ゐ出張し、萬事を奉行しけるか、御本陣ゐ參上し

雨をゐてのち、御進發ゐ、ゐはへくそんじ奉りけと申上しかハ、關白、汝ゐらひや、兵法ゐ、川前ゐあうて、雨ゐあゐ時ハ、ゐやくこれを、渡るへしとハゐ、本文あうと、仰られしとき、熊藏申上けるハ、兵法ゐゐ、何ゐゐ、せ、千二千の小勢おらば、然ゐハへこの大軍先陣後陣十餘里をへだてゐ、ゐし、急ゐ、ゐらんとせは、溺死のその、多くハそん、と、言上せしゐより、關白大ゐ悦ませたまひ、あくゐ三日逗留なう、案の如く半時ゐ、ゐうきくおやいおや、洪水おひたたしくして、民家多く漂没ゐをゐへう、關白熊藏をよびて太刀を賜ゐう、これを賞したまゐ、かくて、雨

それしゃハ・進發あるけるゑ・宇都の山ゑ・至りたま
ゑ時この処の郷民・ちのかゝへゑ・かゝしこまり・居
て・馬の沓とかちぐりを・獻し御勝利の吉兆を賀し
奉ゝ〜かハ・關白戰場よむゑ時かちぐりとハ・殊
勝あり・物とらをよと・仰らゑ・この時・着したまゑ処
の紙子の紅梅の表つきたる・胴服ゑ・黄金そへく賜
さり・この処を・四十年ちかくて・通りたり・むかし・爰
ゑて・休ゝ〜時ハ・藤吉郎よ・今ハ關白従一位秀吉・処
も・むゝの・宇都の山・をさゝゐく人もむかしと同し
く・替ゝ〜ものハ・面影と名のミ・あり・いさ歌よまん
とて

宇都の山・むゝの〜のまゝの人おもとさはさもあり
ゑそ面かゝりそれ・秀吉ゝ秀歌なりそれいけとて
かゝ〜をたまひ〜とかや・をてゑ駿府ゑ入御あるべ
きとて・供奉の行粧を正されける時石田治部少輔
三成・關白の御耳ゑよりをて駿府と小田原とハ間近
くまゝも親〜き姻あり・いゝあるべきゝ謀のあるべきゝ
よ〜〜御思案なりて・ゑはへ〜と・言上〜けゑい
關白いさ〜ゝ御猶豫の体あり・ゝ処へ・淺野彈正
少弼長政まかりいゝ・何とて御猶豫あそされハ
や・御むかひと〜て・そや間ちかく・御出ハなり・居ゐ
から待せたまそんを・無骨ハと申上〜かハ・關白打

さらさをたまひ・御快く・駿府へ入御ましまし・やがて・沼津の御陣城へ御入あり・關白・先陣の大名たちをめし出され・北條箱根をこして・まいらんと・思召ひるゝ・箱根よりこの方へ・首さし出し・得させやぐ軍に勝たるぞとて・御盃をくだしたまひ・先陣の大将たち・いひもし・御諚の通り・北條滅亡ら〳〵かひなくいと・祝したてまつり・さぐめきにくき処へ・驛の役人・御旅館へ参上して・申上げるゝ・只今あやしき旅人のいでき〳〵ふ間・御旅館ちかくゝゐ・由・制しゐへい・御旅館と・關白殿下の旅館おなじや・身ハ・近衛家の・連枝ゝ・關白殿下へ・面會のため下向さし処

なりと申たゝその供立々・杏葉牡丹の金もんかさたる・おなじひゃけし・長掉・狹箱・長刀・いゐも・近衛殿の持せたまふ処と・全く同じくゐへハ・相違ゆ・あるまし如何ちゃらひ申へくやと・言上しけるへ・關白殿下浅野弾正をめしたまひ・ふしぎの人かれとも・供廻るかど・注進の如くい・何さゝ近衛殿の連枝ふゆ有へし・そのゝゝ行むかひ・いゐもふゆ・旅館へ・軍門の上ゝ・去かはへさ・寺院あてゆ見立く旅宿とかし・そのうへへて・面會をへさゝ・と・仰出されしかは・弾正少弼・取そのゆ取あえゝ・拵きむかひ・やがて・走かへりて・申けるハ・仰ふまゝかひ・まかりむかひし

処にさしてゝ半途より色さあひに間弾正少弼路傍より
やしまいり關白殿下の御使として淺野弾正少弼
御迎より參上のよしを申上けるより近衛殿の御連枝
乘物をとゞめ やゝ〳〵のうちめ〳〵戸をひきしやい
弾正少弼ちら〳〵ともくこよりこれを見れば近衛
殿の連枝とおもはれ色黒く頬骨あらて髭は猪
の怒り毛の如く頭は月代さらて鬢うし〳〵上下着
し大小さし〳〵たり言葉は京家の人からし鼻より
つて陸奥人とおぼえ〳〵うし弾正少弼とやらん關白
殿下へよく〳〵申せよとさも緩怠より申ては縄かけは
ても〳〵くはしやかよし〳〵存へとも一應うや〳〵ひ

奉ると申上しやは滿座の面々あきれて おのと
御諚の有やらんと やゝ〳〵ぎを飲て居たりける処へ
殿下莞尓と笑をせたまひ手あらくをへやらし志
からは そのよ〳〵此方へめ〳〵つれ來れよと あるけ
はよりう淺野これを同道し御旅館の溜より出し居へ
このよし言上したりしやは殿下めのしりうへ吟
味をへしと仰られけるふよう弾正少弼まやうい
て其方事京都の人より あるへうらし志 あらば何と
く近衛殿の連枝たらんやいかりうを問へ及さし
有体より申へしと何つし時彼者こはけしやらぬ失
禮をふかまへものかな其方は殿下の家人かるべ

〜其ものゝ〜とへ・惠雲院關白准三后・稙家公の末子
かゝら・陸奥よ・生長〜たるに・音聲に・京都人と同〜
やうに・されとも・正〜〜・今の前關白太政大臣准三
后前久公の弟なり・殿下よ面會をい事明白なりう
るへ〜と・申けるよ・彈正少弼心のうちよ・近衛
殿の御官位以下・そへて・淀と形〜歩うたれに・近衛
家よ縁かき人よも・あるまし〜・さうなるうち・かくの如
きその此まゝなるをへきよあらんと・花りひ既よ
組ふせ・縄をかけんと・なし〜けるか時・殿下御聲たかく・
惠雲院准后の末子なく當太政大臣殿の御弟なり
とや・こゝかゝるへ・御越あるやと・いそれ〜なるよ

彈正少弼そ〜め・その座よ居合せたる大小名自と
目を見あそせ・こそ不思儀なり〜〜 殿下何とて・か
やうの狂者ゝ盗人ゝ・その体あや〜きそのを・御前
ふめ〜たまふや・ゆ〜くに・狐狸のさけしよに・あら
さふゝ・何ふゝせよ・怪敷とゝう・いけれも・膝を進め・
肘をそう・何事ふゝ・ゆれ・越度あらは・我さきよ組け
かんと・御禊の際よ座をし・殿下とものいふ詞を
うゝ〜ひ居たる〜に・誰も〜・あや〜と・おりそぬ
そのぞおき

重修真書太閤記十一編巻之十三終

重修真書太閤記十一編巻之十四

近衛殿歌修行の事
并久下岩松生立の事

關白殿下秀吉公沼津の御旅館へ入て・先陣の大名たちは・面會あらせられ・それ〳〵御盃の次第あり〳〵・をでは・軍勢の御手配は・をよそんとをは處へ・近衛殿御連枝御下向のよしを言上つけ・い・ゆ孫〳〵上ぶ〳〵めしよくたまはるを〳〵いひ・御混雑の折節あり・此処い・入御ありて・迷惑はおかしめ・何ことも・寺院を・黙して・御旅館とおしたてまつれへ

しと。淺野弾正少弼長政は仰付られしは弾正たち
かへり。近衛殿の連枝と申せども其体いろゝ怪
しくひ。いまゝめて。吟味はらまつはへきやと伺ひ
しを。殿下手荒よいゝひへのらひ。此方へ召連来れ
と。御意あるゝかば。もとかくもそのを御旅館よ
めしよをらせ。やがて御前へ召出されゝかよ。其長
六尺ゑあまり。色黒く。髭あれたる形想。只ものとい
見えひ。御前伺公の。大小名いろ〳〵ものゑや。不思
議の狂者ゝ。はるゝみても。不敵のくをものかと。
眼をそるゝひ。守ゝ居たる關白殿下そのものゑむ
かひたまひ。近衛殿の連枝といゑい。其方ら恵雲院

准后の御子といゑゝまとろ。恵雲院殿ゑ。はるゝと奉
ゝゝい。何年そと。問たまへい。父ゑてひ。准后ゝ。永禄
九年七月十日六十四歳ゑて。薨御ゝまひ。おとゝ
ゝ。廿五回忌ゝ。はるゝ。三歳の時ゑてひと實ゑ
よとゝゝゝ。奉ゝゝかゝ。殿下ゝさ孫て恵雲
院准后の御墓ゝいくと御尋あるゝ。恵日山
東福寺乃塔頭海藏院ゑ。葬送してひといゑ。殿下ゑ
た。今の准后ゝいくひはゝからをたまゑぞと。問たま
へゝ。丙申の歳ゑて。殿下と同年ゑひとゝひ。その時
殿下おゑさゑ。その方恵雲院殿下の御子ゑてゝ。ゑ
るへゝ。さゝゝ。その方の音聲ゝ。陸奥ノ形ゝ。い

かゝる上は・准后の御子として・陸奥より・はるゝ〳〵ちゝぶ・
かいまゝ准后の御子といふ・たゝかの証據あり
やと・たづねたまへば・さんは・はるゝ母よりて
ものゝ・奥州南部の・被官なて久下と申ものゝ女房
ゑ・ひとゝせ都見物のゆゝ・東福寺通天の紅葉見
ていひゝ処へ・恵雲院准后からせたまひ・そゝたか
く・廻廊ふて・御目見ゝいひゝ東おる外の濱の者
と・聞ゝめされ・めつらゝき歌まくらゆやと・おゝ
めされ・やゝて御所ゑめゝ置れていあり・おゝはゑ
はるゝ二歳ゑありける年・都ゝ・将軍義輝君・三好
ら為ゑ弑せられ・たまゝ・御墓所ゝ・はれかゝ父准后

の妹ゑていひへゝ・その騒動れゆひやらせゆゝへゝ
それより・母と共ゑ陸奥へくだり・当年まて・住居ゝ
ていひへゝ・音聲ゝ外の濱の善知鳥ゑ似よりていと
正ゝき・證據と申ゝこれゑくいとゝさゝいゝさゝ一
巻を關白殿下御覧ありてそのまゝ巻おさめ暫く
あいやり申ゆおりゑいゆゝ旅行のはかれも有へゝ
弾正旅舘を・沙汰せよとありける・浅野も心得
どげゑゝ・ゑゝひかのら・然へゝ寺院を・點ゝて・旅宿
とゝ・はゝれゑゝいゝて・相應ゑちそうせられたり・其
のち殿下・浅野をめされこの巻物を京都へのぞせ
近衛殿ゑまいらせ・返辞を申下をへゝとあるゝか

へ弾正少弼承そろ奉書をそへて近衛殿よりたてまつれば去ぬる日數へて近衛殿より御書あらかりたてまつれら也一巻ものまゝよ戻したまへよつく近衛殿の御書をひらき見たまへよ仰せあんせら也し如くこの巻物へ亡父恵雲院准后自筆よ相違なしこれへ奥州外の濱の住人久下と申めの女おき父准后よりたゆへ一人の男子をまのけて此ゝ二歳のゝ我等叔母婿光源院義輝君家僕等の為よ殺せら也ぬとひきめ出ぬ都へこゝゝ乃中おれへ東へくゝゝて此我等ゝ弟の此ゝゝ父ゝ筆の跡いさゝゝゝ以て

御うゝがひあるまゝと仰下されたゝ是よ於て再度彼をのをめゝ出ぬ關白殿下ゃの巻物をゃへゝたまひその方父恵雲院准后の御筆大切よいゝゝ去置ゝへたゞゝこの廿餘年のあいゞ外の濱よ居かゝら何と出あゝて只今ゝゝとおもひたちゝよや定めて子細あるへゝ我れをゃゝゝゝゝへと仰らゝゝかゝ我ゝゝゝゝ事ゝ外祖父ある久下ゝ家みゝゝゝちゝゝ自然と人も久下の岩松丸とよびゝひゝゝそのまゝよ久下の岩松と申ゝ奥州へさゝゝ邊土ゝゝへゝ殿下の御威光たけゝまゝんとたゝゝゝぜんゞ申ぬこの度御下向のゝをゝゞ

めて申沙汰していよう我等そんじたきは事はへ
いまやう向ていはうとこさへけるみよう殿下何
とゝおれ〳〵めーけんいゝみ岩松今日へ急々評定
せでいかゝかゝぬとあう旅宿みかへう休息あれや
明日まさ見参をへくいとと仰らもゝへ岩松浅野
ふともかされ旅宿みかへう休息をそも〳〵この
岩松といふその誠へ外の濱の地士かうけるか二
三年以前よや近衛前關白前久公關東へ下向ま
はゝ〳〵去のびやかよ所々見物あうけふゝ下野やむ
ろの八嶋ふたつ畑やくゝ定めぬ旅かれとはかう
たつ孫てむらさきのからぶ筑波の峯とをゝはは

はけはぐる奈須の野をさはれへ誰も白川の關の
板屋をたびぬはどそさと答ふはは人も形〳〵猶おく
深くゝちのくの末乃松山うちこゝて六紀世の人
のめでちやゝ籬ゝ〳〵ぬゝきうあめて八ふ船人
こゝ〳〵ふ八重の塩路のうきしづゝ定めかき身
乃戀衣ぬはてゝ色へかさらしとひきはたゝかあ
屏風ゝ浦へけからへたる網の目ふめらさぬ中の
手枕やいけゝあふせゝ千賀の塩かまの けふゝ
むせふ袖のうらゝ去のへとさるその人と色をも
香をゝ去ゝ人ぞしはゝや宮城の萩の華松のこゝろ
をためしふて千世万世もうおきゝ情をかゝ

蝦夷人のすむといふなる。一の戸や。二の戸三の戸
かぞへけり。八の戸九の戸。越々て。津軽乃里に。いり
たまふ。頓しも西に日へかたぶき。こよひの主人を。
尋ぬれど。人々あやしみ。宿かさず。あまりに。あこが
れ給ひしかば。久下る門に立よりたまひ。行暮たる
旅のその。一夜の宿を。芳志あれと。仰られれば。岩松
ろ父の翁。たゞ人ならんと。見まもりてや。こなたへ。入
せたまへやと。一間とある方へ。請し奉れば。殊のほか
に悦なせたまひ。こゝろなげなる田舎人も見しに
は。よらぬそのもてなしけると。思食けるうちに。御湯ひ
ひかせまいらせ。やがて。柏の葉を。擷して。栗の飯

をすゝめまいらせ。鯖の子乃鮨。鮴の楚割なと。取そ
ろへて。酒たてまいらせしかば。いよ〳〵御心。とけた
まひ。またしなから。夜寝の夢も。御心やすく。むすび
たまひなんとすれども。主人の翁。いろいろ御方に。まし
まして。やゝこゝろふかく。尋まいらせしかば。その真實心
をよろこびたまひ。是は。何某にましますよしを。
有のまゝに。御物語ありしかば。主人の翁。おどろき
おそれ。さては御かくしにて。ましましけるを。しらざり
けるよ。その悔しさよと。以の外に。警衛し。俄に御座を
改めなどしたりしは。まことに。御逗留ありけるか。後
には。岩松御供して。北陸道を。京都まで。送り奉りけり

けるその時國々所々の新關あるべきこゝ人をあつこめ
れ正しく難義をよびれさく憚多き申条ゆへ
とも御尊体はやかろう奉るべしと申上しかれ前久
公よにもうれしげなり打笑たまひさてこそ御系圖
を御認めあるべく岩松は下されしかろ岩松大ゆ悦
ひそれより御紋の本をたまそろ長棹狹箱長刀の
覆ひを作るべしとおくろ

久下岩松謀を關白殿下へ獻ずる事

并南部領内騒動の事

關白殿下久下岩松ろ存付しをあるべく參上したろ
といふををそしやへしく考へたまへとも更ゆ

おろしめし付かきみよろ夜明しかれ岩松をめし
出されその方昨日申せしを存ぜきとそ何ゆやと
仰られけるる時岩松臆をかゞ邑もかく一大事の謀ゆ
れへへ多聞をそぐやろれ弾正を御除くさけれ
へと申よろ淺野を御次へきろぞけ關白殿下と
岩松と只二人さしむかひたろその時岩松きゝ
よろ申上れやろ小田原の北條をてゆ東國の權を
取れと百餘年ゆ及へり去られ關東八ヶ國のそ
か陸奥出羽のそてまでも年來の親しゝあろその
上ゆ唇法きて歯さむしと申諺の如く小田原亡び
くのち佐竹弱かるへし佐竹そろびく伊達南部寂

上の人々次第よ敗走さとおて鏡をかけて明らかに
マ然ハ殿下御下向とを〳〵ていづれも〳〵小田原
後詰の用意を仕うひへども此諸家をの〳〵自立
の心あはらを拒ゑよ急速よべ北條と一味同心仕ら
ひ〳〵さろ彼とのら中よ就〳〵佐竹の腹心のやまひと
申ハ鹿嶋行方の諸郡よ二千三千より五六千許の
地を領〳〵ひ侍三十三人あり これを三十三舘と申
ひ小幡の大炊頭辰勝鹿嶋の十郎治時主造の右京
大夫宗幹畑田の右衛門大夫通幹手賀の與一太郎
景幹根古屋の彦四郎詮春鉾田の市正札の治部大
輔繁幹中居の式部大夫定幹武井の加布美濃守林

の弾正時國津賀の大炊助小川の薗部入道兼紫小
高の刑部少輔定久嶋崎の左衛門尉幹義花澤の弾
正忠通幹大生の太郎玄幹下吉影の野口忠兵衛八
田の下河邊式部大夫西蓮寺の小貫藏人田伏の五
左衛門麻生の三郎常安坂戸の芳賀伊賀守茂園の
小倉長左衛門嶋並の高須日向守青柳の武田大膳
亮信家武田の淡路守信房山田の八郎五郎家久海
老澤の伊勢守盛則鳥羽田の隼人正盛信行方の刑
部少輔貞久かと形ら この〻とも佐竹を恨〻て
ひへハ佐竹小田原へ出陣せハ その跡を襲そんと
合從連衡てひを佐竹氣遣ひて はらは身を動かー

得けれ・よろ〳〵・佐竹ゐ・この三十三舘を・こゝろ次第
と仰付らるゝ・常陸國へ・たちまちゐ・治まり申
べくは・陸奥國ゑ・小田原よりも・よゐどの・行程を・へ
だてゝへゝ・勢をいざけまぐくへ・たゝひよらびけへ
ども・葛西大崎と申て・人氣の・ゐ所を・処あり・御仕置
次第ゐ〳〵・たちまちゐ・一揆をあらやべく・その費ゐ
のらんと・企くけゝ・國中ゐ・こちら〳〵たり・又伊達
と相馬と・ゑ代々遺恨の國ゐ・たゝひゐ・その隙
を伺ひけ事かれゝ・何ぞゝ足長ゐ小田原まで・こちら
出け事ゝ・有へのらびけ・はりかゝら・殿下小田原と
御せう合・月日をかさ〳〵・よき時節ありと・堺

をかゝ〳〵地をきろとりて・奥羽の間・おさまりが
たくけへ〳〵・よろ〳〵・某ぞんじ・はをけ計事ゝ・別義ゐ
もけ・くゝび・某ゐをまひけ・津輕外ゝ濱の在地ゐ於て・
一揆を企くけへ〳〵・尤をれゝ・南部をゝ〳〵め・陸奥出
羽の大名小名・いづゝけ自國のさかひを守ゐ取〳〵
取れ〳〵とのゝ・心を決し〳〵・小田原一味の約束ゝ・たち
まちゐ破けへ〳〵・尤をれゝ・北條たけ〳〵と申けゝ
孤立の勢・何ぞのとゝけべき・その中ゐ・御計策ゝ
ゝ〳〵・關東平均ゐ・太平をとかへ申へ〳〵・關東平均ゐ
治まりけ上ゐ〳〵・奥羽へ御勢をむけらるけ〳〵・破
竹の如くゐて・誰一人・御簾ゐからかけものゝあ

らん。一両月ゐか。陸羽両國六十餘郡一統ゐ殿下の御下風ゐおびきゆへ〳〵と。言上〳〵けれゐ。關白殿下御手をゐ〳〵せたまひ。ゆゑ〳〵驚入たゐ。そのゐうの妙策今まで〳〵さらゐ。おぼ〳〵しぎ。いゐゐ。存分ゐ。ユ夫をめくら〳〵。奥州羽州の者どゆ。白川。勿來の關を。こさ〳〵ゆやうゐ。取ちからひゆへと。仰付らゆ〳〵ゐどゐ。岩松々日ころの願ひ成就せうと。よゐこびゐがら。殿下ゐ。ゐ〳〵たび。申上けるゐ。御直ゐ。うゆ〳〵ひたるぞゆうゐてゐ。後々の證據ゐゆゐうゆ。御朱印賜ゐうゆ。ゆ〳〵やと。申上〳〵ゐ。尤ゐうとく。淺野ゐ仰付らゆて。その日ゐ

埒明けゐゐどゐ。岩松三度頂戴〳〵。これを頂ゐ。かけもぐゐ旅宿へ立かへう。並川為八とて。相傳の郎等を。台具〳〵したゐをよびちゐ。ぢけ殿下の御ゆ。ゆ〳〵を得たう。これ拜見せよやと。御朱印をいぐ〳〵戴かせ〳〵ゐ。並川ゆ實ゐ仰天〳〵。ゐやうの大事やと〳〵と叶ひ〳〵とこそ。不思議ゐゆ。さらゐ。早々歸國あうて。ゐ孫々の計策披露あゐへ〳〵と。夜を日ゐにいぐ。馳〳〵ゐとゆ。路次ゐ種々のさ〳〵。あゆ。沼津を發途〳〵て十六日といゐ。外ゐ濱へ。下着ゐ〳〵たう一族門葉よびあひむゐ。岩松上京〳〵たう〳〵。ゐへう着〳〵と。ゐらせたう。その上ゐ。ゐ〳〵ゐべき大事

あうと・觸たるハ・何事やらん・いさや行て聞へ〜と・うちハ出〜引もきらぬ・岩松ゟ家よ・よりあひまゐ・たゞ・田舍おれハ・坐敷も出居も・ひろ〜と・造ア〜家とハ・言おゃら・二等三等・四等・五等の親屬のミやハ・ゆかゃゟ縁の末ゟを召・家人奴婢乃下々ゟ至ゟまて去ゟ〜〜交名よゝあくゟ負ハ・一千五百餘人の者到ゟ・岩松たちいぐ・近衛殿よゟ・たまゟ〜杏葉牡丹の旗おゝたて・關白殿下の・御朱印を頂戴ひへとて・披て是をよゝあぐれハ・いづれも・ありと・首をさげ・額よあせ〜て・かゝ〜おまゟ・軈て南部境よ關をを召・津輕外ゟ濱一圓よ・久下岩松關白殿下よゟ・拜領〜たゞと觸ロゝ〜・南部へ納むゟ・貢物を抑留せ〜かハ・南部の騷動大や〜おらハ起ゟ〜南部の元祖三郎光行ぬ〜文治五年ゟ〜めて・この地よ至りたまひ〜より・嫡子彦次郎實光・嫡孫又五郎時實と相傳〜・それより孫次郎政光・彦三郎宗綱・彦五郎宗行・彦次郎祐行・弥三郎政連・彦太郎祐政・右馬頭茂時まて・十代鎌倉將軍の世を過〜・茂時の子を・伊豫守信長といふ・信長の長子ハ・遠江守政行・家督をゆく次男ハ福岡河内守政房ゟ・政行の子を大膳大夫守行といふ・この代より・雙鶴の紋を用ふと・いへゟ・その子義政・その子政盛・その子助政・その子光

政その子時政その子通継その子信時その子政康その子安信その子今の信直まて代々大膳大夫と稱せしなり

別本家忠日記ハ天正十八年八月十五日會津領内大沼河沼稲川耶摩猪苗代南山六郡仙道ハて白川石川岩瀬安積二本松等五郡七十二万石蒲生飛騨守氏郷ハあさえ葛西大崎三十万石木村伊勢守父子ハ與え伊達政宗ハ本知羽列米澤三十万石をあたへ淺野長政石田三成大谷吉継をして奥列を換地せしむ十月葛西大崎ハ一揆起る この時木村伊勢守ハ葛西ハあり子息孫一右衛門ハ大崎ハあり家老成合平左衛門ハ佐沼ハあり廿二日一揆佐沼をせむ廿六日氏郷家臣をして木村を援けしむ十一月朔日氏郷會津を發し十二月淺野石田大谷奥列換地畢て上洛をゆ処一揆の沙汰をきして奥列ハ引返さ天正十九年正月十日秀次相列早川ハして一揆平均の告をなすとなり

重修真書太閤記十一編巻之十四終

重修真書太閤記十一編巻之十五

南部勢津輕へ發向の事

幷久下岩松南部勢を破る事

久下岩松ゝ一揆を發せしを南部へ注進くの齒をむくゝ如くなりけるゆゑ南部家騷動以の外ふして急々人數をさし向け踏ほふし岩松ゝ首を取きゝれと評定一決せし処ゆゑ南部玄蕃ゝくゝ出て申けるゆゑゝ程の事を起をとおかゝ以て久下一人の力ゆへあるへからず村々へふれたる廻文ゆゑゝへ關白の朱印といふもの全くの偽なれ

あるへやらば早く使節を關白へたゝかせ〻實々關白より岩松へ朱印を賜そうゝや否といふとも遅〻ぢめそのうへ又て岩松を征伐あるとも遅からゝと申けゝを諸侍一同ゝ又おど玄蕃ハ左やう又臆ゝたゝよか關白とも攝政とも いくゝいへ尾州の地下人藤吉郎とやらんゝ成出ゝかゝみ何とて手をさげ腰をゝめて音信をへきや岩松と云その子家人形ゝ主ゝ家人をうけゝ何の子細ゝあゝへき早討手をさゝむけよやとさびゝさ下知ゝ玄蕃も今ハせんやゝ形〻津野戸越中守を大将として二千餘騎をさゝむけたゝ此より岩松

方へきこえゝかハ兼て期ゝたゝとゝてあるへハ二戸の切処を要害ゝ取たて杏葉牡丹の籏いく流ゝおゝたて その間ゝ搔揶やを勢のゝど六七十人をゝゝして固めたゝ然ゝて谷の隈まゝゝ大木の林のゝげゝゝゝ父下作右衛門稲葉左衛門を両大将ゝて究竟の兵士百五十餘人鉄炮のその八十餘人をふせゝゝけゝ越中守ハ要害ゝおゝよせ見わたせば實ゝ浅間ゝそかへたゝさゝあるへ〻岩松ゝ分際ゝて何ゝどのとをゝ去ゝゝへき早々せめのゝゝ蹴ちらをとハふゝ逆雄の若さふらひ我をとらゝと責たつゝハ難形〻木戸際ゝおゝ

よせたり城門の内より鉄炮少々うちかけしかども
藁よハけもい裏かくまてよいさらに そのうちよ
逆茂木ひきのけ木戸を打破り乗いりて見れハ皆
落うせて影もなくなりたきたてたる篝火の蔭より柳
二三荷かさからべ その脱ぎやら鞭六七ちらち
ちたる越中守からくと打ちらひ 實ハ田舎人
のようあいまう勢みて あらそう是等ら心みて我
我ふむうみて軍せんと おりひしとの不思議さよ
といひ形ら 傍の柳ハ目をかけ なのその是へと
取よせ一口のうて 舌打ち 處ハ似合ぬ酒の味是ハ
いかおかしやらんと 引うけ〳〵 飲をうて 侍も組

頭も雑兵下部ハ いかまて 辛鞭をさきて 篝火の
餘りふ あぶり これを 有ハ 二三荷 あるいる 柳を ミ
ふ飲いくしくれどハ 酒ハ えよう津の國の池田ハ
かもせ 上酒ふもい ものふ酔ハ 越中守
をくめ 前後もきらく たるれふ たる 時分へよ
しと 久下作右衛門 稲葉左衛門 鉄炮をうちかけ
開をはくう 二百餘人 面もふらをはさかしれども
酔どく 眠りこけたる南部勢いけもの 用
ふたつへのらく 立ものりてい 打たをもの 弓矢を取
ども 目あてさまらを久下ル 稲葉ル手をたくき
心地よう 我等 えかりまくハ 敵を酔をたう

醉たるめの武・打殺さんも・不便あり・鬢髭をそりて追かへせ・たゞし・越中守はいまゝめよとゝく・高手小手ふ丸ぐるひげ大木ふ付かぎ・馬をのゝぐを分捕し手始よしと・勝鯨波を作るゝ・城戸をゝさめ・用心堅固よまわりけり・南部へ・鬢髭をられし敗軍の士卒・そせかへり・二の戸のいくさよ・打負しのゝ越中守へ生捕らゝと・我々ゝやくの如しと注進しけゝへ大将・そゝめ諸侍大将・物頭衆・いけれゝ・大よ憤り・ふくき岩松ゝ軍配や・このうへへ・大軍をゝて・追手やらめてより・攻入・只一時よせめぬくへしと・下知しけふ処へ・上方へはゝそゝける・そめゝ共

そゝりまかへり・注進しける・そ・はくゝ關白秀吉畿内南海・中國・四國・西國の軍勢・二十万餘騎・ふく・東海道を發向したまひ・山中箱根の嶮岨をうちゝ・石垣山を本陣とし・小田原を自乃したゝ見おろしてロロより・攻たまふ・まゝ北陸道よりは・羽柴筑前守利家・上杉弾正大弼景勝・両大将ふく・六万餘騎・碓氷峠をうちこし・坂本ふて・一戦し・松枝の城をゝはゝ・箕輪・沼田・厩橋をうちをとし・上野一ケ國は・そゝや北條の手をそゝ形ゝは・小田原落城遠ゝからは・北條ゝろびはゝゝ・佐竹ゝいて・減亡しそゝれより陸奥・出羽ゝゝ・關白の攻りたまそんを・疑ひかしと申てゝ

と、いへば、南部の諸臣いのもとに目と目を見合せ、如何あらんと、吐息をつきて、扣えたり。南部玄蕃進み出で、又申上るは、御意は入れまゝ、去ぬから申さぐはい、家臣たるものゝ、道あらば、よろしく、おゝしめを、やへうしば、まゝ申上るは、拙もく、關白の小田原へ申達せられし條目を見るに、國郡を領し、ふゝから京都へ貢税を納めば、官名を称し、身ふて朝家の宣旨を申さば、自由のいゝなり、横道ぬうと申を以て、考へるへば、當方とても、同じことなれば、前車のくゝがへふゝ、後車の戒と申事のは、さやく、關白殿下へ、使者を奉らば、遠方御下向の事を勞し奉り、その上ふて、

自國一揆の、起りは、北へは、直ち参上仕らば、さやく、一揆退治の、御免を蒙りは、さぐやと、御祢がひあうさとゝ、はべくはと申けるとは、大将大み、怒らば、何事を申ぞ、當家は、新羅三郎の的孫として、當國を鎮め外夷を防禦しは、をでは四百年ふをよび、鎌倉の将軍家より、このやゝ、京都将軍家まて、何の御沙汰もなく、代々の家例を以て、をさめをゝ、南部領あり、文治より以來二十八代の帝王は、御ぬる、あゝ、當家ぬう、拙を關白秀吉とやらは、そのしゝ顔は、彼是と執行人とあゝ、こゝろえ様、秀吉寄來るとは、何ぞの事をゝ、仕いさばへゝ、更ふ彼奴ふ、音

信をへつらひ、やさ孫く左やうのことを申いくしば
ちぐ謀叛人と同列たるべしと怒られしかい玄蕃
し、かへをへさき辭ぞく、その坐を退きたる老輩第一
ぞる、玄蕃だよ、かくのごとくぞもとい、誰ろふ〳〵び顔
を犯してこれを諫むへらいびれも口をたくんて、
かーこまは大将やかて、立あかり、誰ろあるを着長取
いくせ、これ自身かけむかひ、岩松を打殺して腹を
いんと、いらちーかとも、何も玄蕃ろ申処、正當な
ことと思ひ一処おれい、御先をかけんといんとものも
なー大将不思議のものどもかな、我出馬せんと云
ふ供せんとゆせん、悒然たるい、何事そやいのもも

岩松一味のものあるふやと、いくはく処へ、又のや
早打、伊達越前守どの關白の御味方とて、小田原
へ、參向いくされい、次ふ小田原の支城武州野州両
總州ふある処、四十七ヶ所、おとくく落城いくー只
今い、小田原一城ふあるう、それさへ、ロ々攻破らも、落
城四五日をいつへつらん、佐竹どのい、をでふ降參
いくされ、那須宇都宮いのもも關白殿下へ參上ー
くれぞう遠からん、奥州へ攻入たまへき由ふい、
御用心あるくおろはへくれと、申けるみよう、さん
ろ剛勇我慢の大将ゆ、あをきれて、自國ふて、伊達、他
國ふて、佐竹、那須おと、關白ふもくさかふといへい、何

さゝ。當方へ。よせをゝ。ゆゑ。有へ〳〵。出陣して。その跡をうゝれかへ。後悔をかとも。その甲斐あるべのちにとく。無念おから。自身ゑ向をんとも。為ゑをゝ此虚ゑ乗〳〵。岩松ゑ。次第〳〵ゑ。きろ従へ。津軽郡内ゑ。いゑゑ及をゝ。大浦浪岡。外ろ濱おのゑよ〳〵ゑ村やぶろ。切ふせ。その〳〵ち。収納をかるく〳〵。百姓を憐れミ。けふゑよろ。いゝ〳〵ろ。岩松ゑ従ひおびくこと風ゑむかゑ。草木ゑ似たろ。はをい。後ハ。まらゝ。今眼の前の賑ち〳〵さ。たとへを取ゑをのおく。いとたのゆ〳〵く見えゑゝろ

關白山中城責御下知の事

并渡邊勘兵衛働その事

天正十八年三月廿八日。關白秀吉公。沿津の城より中久保の城ゑ入御。駿府大納言家ゑ。御對面。御咨談數刻の後。夜ゑいろて。戌の刻。沿津ゑ還御それよろ。御湯ひをたまひ。淺野長政を召せられ。箱根おらびゑ。山中の繪圖を。御覽あるゑて。夜半ゑをよゝころ。福原右馬助。をめされ。その方。たゞいまよろ。諸將の陣屋ゑいゝろ。明日。山中の城を。せめ申へをよ〳〵を觸ひへ。時刻をたゞゝゑおと。仰付らゑける。その人々ハ。たゞ〳〵ぞ。北畠信雄の軍勢。蜂須賀阿波守家政。福嶋左衛門大夫正則。細川越中守忠興。蒲生飛騨守氏

郷・中川藤兵衛秀政・森右近大夫忠政・戸田民部少輔
これらハ・韮山の城を取やむへし・とあり・駿府の
御勢ハ・中久保より・山中越を・小田原口へ押たまふ
山中城へハ・近江中納言秀次・堀尾帯刀先生吉晴・山
内對馬守一豊・一柳伊豆守直末・以下・中村式部少輔
一氏・田中兵部少輔吉政等・總軍五万餘騎とあり・堀
左衛門督秀政・木村常陸介・丹羽五郎左衛門尉長重
長谷川藤五郎秀一・これらハ・山中城の南のやゝよ
まひ・深谷を隔てゝ・嶮岨の峯よのぶり・攻討へし
とふれらるたり・やゝゝ・關白殿下・秀次卿の・そばへ
乃上ぶる・山へ攀のぶり・御馬を立らる・中村式部少

輔木下美作守を・めゝ仰らるけるハ・此處より見渡
すたる・出九まてハ・十町も・あるへく・今をこゝ
陣をよせ・仕寄の根小屋を用ひ・然ハへきむね・仰ら
るゝハ・式部少輔承たり・渡邊勘兵衛よ・かゝくの
御諚ふく・あはゞ・如何して・よろしかへきといふ
勘兵衛・鬼角ゝ・山峯多くへぐたるて・委細
見ハ・ゝ・我ゝ・ゝ御先へ參る・一左右申上
へゝと申・鳥毛の大半月のさゝをさゝ・七寸餘
りの・大黒といふ・駿よ・うちのり・出ゝ・立かへり・見
えわゝるたる・出九の普請をゝ・淺間ふて・攻破らハ
べくハ・招きヤへき・条・御勢をよせらるハへと・約束

おゝ・ちかゝと・走よりてこれハ・遠くらゝとハ・やうかゝろう・思のゐゝ・普請ハ・麁相あり・ゆゑとハ・麁忽の注進いやゝと・一町ちかうと・見れる処へ・乗付見たる処・張番ハ・いゝゝ置ける鉄炮の者・五六十人許ハ・有けるゝ・何とおもひけん・引て入しゝよつく・勘兵衛いよゝちやく乗上しゝハ・その邊ハ出張有ける鉄炮のもの・一度ハ・けるへ立しゝやとハ・勘兵衛を強ちハ・追下さんとせし・鉄炮の畑乃をきよう・見れハ・出丸崎の・幅やう〳〵 三十間ばかり・いゝゝ御勢をよせらゝ・去ゝゆへを・首使者を以て・ハ・申入・又糸を以て・ま孫をゝかい・七八町ハ・あゐゝ処を・即時ハ・弐部少輔・そせのゐゐゝ間・勘兵衛・ろうかゝめゝ処へ・五六人をゝゝう・誰々参りたるぞと・渡邊ハ詞をかけゝ形う・勘兵衛・弐部少輔へ・使者を以て・ゐゝや仕寄ハ・をよそ・一旦せめハ・おるべうおぼえハ・条・そやせめゝ〳〵ひゝん・と・申・馬ハ打のう・堀きはへ・そせつくと・いか堀へ飛入しゝハば・跡より・十人をゝう・引つゝきて飛入しゝハ・そや渡邊ハ・真先ハ・塀の上へ・乗ひへハ・關白殿下・御覽せられ・鳥毛の大半月ゝ・ふかまひを・ゐよやと・宣ひゝ・御尻をまくう・打たゝき・そや大貝を・吹たてよと・仰らゝ・いゝハ・音太ハ・ふきいでぬ・勘兵衛跡を・見かいうれへ

ハ成合平左衛門尉・高屋助八郎・坂井兵右衛門・吉田武左衛門尉・渡邊新右衛門尉・赤井久左衛門尉かと
たゞいゝ〳〵う・出丸の幅三十間さかう・長三町余あう
敵ハ追をかひ・ほゝ〳〵う〳〵かい・流石かる敵共ハて
二三度かへ〳〵合せ・たゞくゃくんとせ〳〵を勘兵衛大
音聲をあげ・ほを間あらせ以・追立〳〵・三丸去をう際
まて・追入〳〵やと心・他の勢ハ・一人も交えく・中村ろ
勢のゝ形う・右の谷をゝ・ゝれハ・大母衣かけたる武者
二騎ゝせ四をゝう・ゝれを押〳〵を・餘多かゝらめて
へ乗入・二人ハ・やかて・首取て御本陣へ・持参したう
渡邊ハ三の丸の門かくゝを相添・上簀戸あゝ〳〵城

付入みせまく〳〵欲〳〵見〳〵いかとも・手前無人形う・まく
むかふて丸の塀ようう・多く鉄炮をうちかい・去も
〳〵ためらいひき・ほと共勘兵衛ハ續きゝい・坂井兵
右衛門・渡邊源七郎・中川金平・中村三次・土方孫次郎・
古田久左衛門かう・いゝくゝやいいれも・鉄炮ハ・中
ゝて果たるかゝ・手や淺かうけん・源七郎一人勘
兵衛ハとめ・ほ以・跡をくゝめたう・さても勘兵衛又
真先かけ・ほをうの垣をのうこゝ・世間さかうも・追
立ゝ〳〵かとも・二の丸ハ門櫓丈夫ハ〳〵て・のう
いかへきやう・かゝけるふよう・門の脇を打破ま
込入ゝへ・歴々の侍・多くゝせをゝう・防きゝを・勘

兵衛一鎗参ひさんと聲かけ突やゝ引へい二の丸へはせ入いめぐり二の丸へ乗入れい大ぜい侍多くふせぎ戦たゝ立ゝ本丸へ乗あがり内を見ゆへい大ぜい廣間あって武者二百余もあるへし勘兵衛とびをり突やゝ引かい乾の角の矢倉へ引あがりひを付入み

去ぬるゝ城主松田右兵衛大夫加勢ゆきゝ間宮豊前守同式部同源十郎同監物池田民部少輔推津隼人正佐藤左衛門尉栗本備前守山下兵庫同源次山岡左京片山大膳富田豊後守等めぢや有よしきとや出あひ戦して果ゆよりその

九も落去して引ひしぜり今日出丸より本丸まで

のきゝらき誰先を爭ふものもぜり中村ら手ちか

又の高名ぜり中村ら馬去るゝを本丸の矢倉み出

したゝ山中の城をい中村式部少輔一人ふて乗取

去とよぢりしぜり中村ら式部少輔い渡邊ら骨

折をへ莫大なる忠義を立たりと悦ふてかきりなし

關白殿下より中村ら忠節よろこひ出ぶしめいと

の御使両度ふをよひしぜり其後勘兵衛式部少輔

ふさゝやきい小田原ふあるゝもやゝしげやゝ打

ぬぐきゝ又ゝ申ゆ今日のやゝふ城を攻やぶり諸卒

つゝれたる時功者なる敵い夜うちをかけゆその

のよ〳〵承さろをよひい・あの赤げ山よりぐさ・廣さ
平ろうと・見え申ひこのたいらよ・御旗をたてらと
勢を・集らと・赤うはへくひ・そんやと・いひ〳〵ゃい・中
村左ろうと・同〳〵勘兵衛さ〳〵圖の処よ・勢をそろへ・
夜番大や〳〵ろ・寺油断おく〳〵・ろそ〳〵・そて・御本陣よあ
ろ〳〵・御ろのいのそのよう申上〳〵ゃい・關白殿下・心
きくたる・古はそそのやかと・御褒美あろ〳〵とゃや
小田原ろうび〳〵のち・中村式部少輔駿河を拜領せ
〳〵い・山中をうち落〳〵たる・功よよはと形う・赤うれ
い・渡邊勘兵衛ゃ功をたゆ〳〵賞せらはへきよ勘兵
衛中村ゃ手をそ形と〳〵ゃい・いゃ形はへよや・堀尾

帯刀雲列嶋根郡い・湖水を南ふ〳〵・蒼海を北入〳〵て・
おくさき多き処ゆう・この処を・あたゆへ〳〵と云て
勘兵衛を・ま祢さ〳〵ゃとゆ・伊豫國の先約あろとく・
雲列へ行さろ〳〵とゃや

重修真書太閤記十一編巻之十五終

慶應義塾

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan